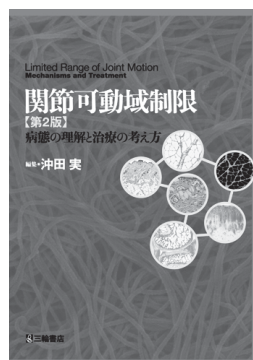


沖田 実(編)

関節可動域制限 第2版 病態の理解と治療の考え方

評者 平川善之

(福岡リハビリテーション病院)



関節可動域制限——臨床で最もよく聞く言葉であり難敵な強敵であるが、その詳細を説明できたうえで治療展開に結び付けているだろうか？ 恥ずかしい話であるが、この問いに答える自信はない。しかしわれわれはこの難敵に対して、効果的なりハビリテーションアプローチを実施することが求められる。そのためには関節可動域制限が生じるのは何故なのか？ という根本的解釈が必要となる。本書にはこのアプローチを実践するために必要な根本的知識が多く備わっている。

本書は、2008年1月に発刊された『関節可動域制限——病態の理解と治療の考え方』の第2版として2013年5月に出版されたものである。その内容は、第1章では「関節可動域制限の基礎」として関節可動域制限の発生状況と発生要因などその基本的事項を整理したうえで、本書の特色ともなる関節可動域制限の病態を筋収縮に由来するものと拘縮に由来するものに分類し、その違いを説明している。そして第2章では「拘縮の病態と発生メカニズム」として、動物実験の実施方法を示したうえで、皮膚・骨格筋・靱帯・関節包・その他の関節構成体などそれぞれの変化に由来した拘縮の成因について、過去の文献のレビューとともに豊富な自験例を紹介している。そして第3章では「関節可動域制限に対する治療の考え方」としてストレッチングや物理療法および振動刺激を利用した治療効果に関し、これまでの報告や自験例を織り交ぜながら考察を加えている。

その一端を、私見を交え紹介したい。まず関節可動域制限を筋収縮と拘縮に由来するものに分類されてい

る。臨床では両者が混在していることが多く、症例の状態を適切に把握し、臨床推論を形成するうえで重要な示唆となろう。また拘縮に至る症例の縦断的な調査結果を十分に検討し、骨格筋にその責任病巣の多くがあることを提示し、その発生や進行のメカニズムをコラーゲン含有量の変化や形質転換成長因子の発現といった分子レベルにまで示されている。また骨格筋の次に関節可動域制限への関与率が高いとされる皮膚組織(皮膚性拘縮)に関しても、非常に多くの文献や自験例が紹介され、非常に興味深い内容となっている。

近年不安といった精神的な要因が、疼痛などの治療成績に強く影響することがわかってきている。この症例の抱える不安をできる限り軽減するために、各症例に合った、理解しやすい方法でその症状を説明できる能力がセラピストには求められる。本書を精読し理解したうえで症例と向き合えれば、症例に安心感を与えることができ、治療に欠かすことのできない信頼関係構築の一助となるだろう。この過程に本書の多くの知見は非常に役立つものである。

本書は臨床と研究をつなげる「架け橋」となる書籍であると思う。日々患者と向き合うセラピストにとって、目の前の患者の状態を理解し、患者に一步でも近づけることができる、患者とセラピスト間の「架け橋」にもなる良書であると断言できる。

●A5・240頁・1色刷

定価 3,360 円(本体 3,200 円+税 5%)

2013, 三輪書店刊